現代中国における道教系気功の伝統継承
－全真龍門派性命双修内丹術第十三代・席春生について－

平沢　信康*

Tradition of Daoism Qigong in China today

Nobuyasu HIRASAWA*

Abstract

Qigong has more than 2000 years of history. It has been regarded as a Chinese cultural treasure among Qigong researchers. It consists of several types, which are Medical Qigong, Sports Qigong, Art Qigong, Educational Qigong, etc. From a religious view point, Qigong has a few traditional background in－Buddism, Confucianism, and Daoism.

The main purpose of Daoism is nourishing human life. The aim of this paper is to introduce a Qigong master in China today, whose name is Xi Chunsheng (1951-). He is the president of Chinese Longmen Alchemy Research Institute.

He began to study the Taoist health-preservation culture of China at the beginning of the 1970's. As the representative of Chinese taditional health-preservation culture handed down from ancient times, Taoist health-preservation culture is broadly acknowledged in academic circles in China and abroad.

He is also a successor of Chinese traditional Yang's Taiji Boxing. In the past 30 years he has made a broad and thorough research into Chinese traditional culture in health-preservation areas and attended many social activities and conducted relevant academic research.

Xi was honored as an expert by the academic committee in the first 'World Conference of Taiji Training' in 1994. Entrusted by the National Sports Committee, Chinese Wushu Research Institute hosted the conference.

Xi's numerous honors include being the instructor in the second and third World Conference in 1995 and 1996, as an expert of traditional alchemy and Yang's Taiji Boxing. He was also the initiator and president of the 'Chinese Taoist health-preservation culture salon' and 'traditional Taiji boxing salon' in the 'World Conference of Taiji Training'

He is a leader of a Daoist sect known as 'Dragon Gate' in the Daoist group 'Teaching of Complete Perfection'. In this tradition he has learned and mastered the 'internal alchemy' method, which is called 'simultaneous cultivation of the nature and lifespan'

* 鹿屋体育大学　National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

KEY WORDS: Qigong, Daoism, Chinese Traditional-Health-Preservation, Neidan (Macrobiotics)

はじめに

道教（Dao-jiao）は，儒教・仏教とともに，中国の三大宗教の一つである。その教理は，不老長生を求める願いと，老子・荘子などの無為自然を中心とする道家思想とを原型としている。そのなかに，卜占いや五行思想や医術などが時代とともに流れ込み，他方，儒仏二教の倫理や儀礼も融合して，現在みられるような多神教としての道教が成立している。不老長生のための修行としては，辟穀，服気，導引，胎息などの呼吸法，養生の法があり，また，存思のように神々を脳中に思い描く観想法等がある。[1]

外国人による中国の道教に関する本格的な研究は，今世紀のことに属する。

ドイツでは，中国学者リヒァルト・ヴィルヘルムによる道教経典の訳文と解説に，深層心理学者C.G.ユングが長文の「ヨーロッパの読者のための注解」を付した共著 Das Geheimnis der goldenen Blüte, ein chinesische Lebensbuch の初版が1929年に刊行された。[2] フランスでは，著名な東洋学者の一人で，コレージュ・ド・フランスの教授も務めた碩学アンリ・マスペロ（1883－1945）の道教関係の歴史学的遺稿が，第二次世界大戦後，P.ドミエヴィルによって編集されている。[3]

わが国では，歴史的に漢学は伝統があり盛んであったが，道教研究は儒教研究や仏教研究に比較すると極めて微弱であった。わが国で道教の名を冠した先駆的著作とされるのは，大正12年に出版された小柳司気太（おやなぎしげた）の『道教概説』であるとされる。その後，小柳は北京での調査を基に，昭和９年に『白雲観志』を東方文化学院東京研究所より出版している。[4]

近年では，福永光司による一連の研究業績[5]に加えて，石田秀実による『気・流れる身体』（1987年）と『からだのなかのタオー道教の身体技法』（1997年），あるいは『道教事典』と道教文化研究会編『道教文化への展望』が出版（いずれも平河出版社，1994年）されるなど，1990年代に入って道教研究が活性化しており，道教に関する詳細な情報が容易に入手できる時代になった。

さらに道教と気功に関係した研究書を挙げるならば，坂出祥伸『「気」と養生－道教の養生術と呪術』（1993年）と，李遠国『道教と気功－中国養生思想史』（太平桂一・久代訳，1995年）が人文書院から，1996年に坂出祥伸『「気」と道教・方術の世界』（角川選書278）が角川書店から，それぞれ出版された。やや関連した研究として，1994年に三浦國雄『気の中国文化－気・養生・風水・易』が創元社から刊行されている。

1980年代以降，わが国において気功はブームとなり，その後90年代に入って若干陰りはみえたものの，今なお多くの類書が出版されるなど，その人気は高い。しかしながら，気功のなかでも道教系の気功についての正確な情報と認識は，未だ日本人の間においては薄弱と言わざるをえない。とくに現代中国社会における道教系気功の伝統の継受と，その活動については情報不足であるといわざるをえない。

鹿屋体育大学は，「運動と健康」を教育・研究上の強化重点領域に掲げている。中国の道教系統の気功と，その養生（yang-sheng）文化について研究を深めることは，本学の理念に添う研究の一つであるといえよう。

そうした手始めとして，本稿は，現代中国において道教気功の中堅指導者として活躍中の席春生（北京・永定門外に在住）の経歴と活動を紹介することを目的とする。席は，1988年に中国道家正統養生学のなかの最高の資格である全訣全法遞接證書を修得している逸材で，華夏龍門内丹術研修院を創設し，院長を務めている人物である。中国

養生文化の研究と教育に専心してきている席は，今日の中国のなかで，道家伝統養生文化を真に正しく理解し得ている極めて少数の正統的継承者の一人であると学界から認められている。

1　席春生の修行経歴

席春生（男性）は，1951年，内蒙古の呼和浩特（フーホーハオトウ）市に生まれ[6]，早くから武術と健身の道を好んだ。初め北京で，八卦掌（宗教的色彩の濃い武術の一つ）と太極拳の師範である崇煥文の門に弟子入りして武當太極拳を習い，後に著名な拳法の師範である李鳳亭ら，多くの武術や養生の名家（かつて李は著名な洪拳の師範である房多三に入門し，後に著名な養生家である劉渡舟について修行した）を訪れ，交わった。[7]（太極拳，形意拳，八卦拳を「武当三派」と呼ぶ場合がある[8]）

このころ席は，李から道家の養生気功の技法を学んだほか，正統的な太極拳を伝える楊澄浦の子・楊振基を師として正宗楊氏太極拳をも学んでいる。[9]

1970年の初春，彼は北京で偶然に，中国の道教の一流派である「道家全真龍門派性命雙修内丹術」の第十二代として道統を受け継ぐ人物であり，かつまた千峰先天派第一代弟子として著名な内丹術養生家・牛金寶（玄金子と号す）と出会った。牛に弟子入りして道を学ぶこと18年余にして，全真龍派性命雙修内丹術の全功法理論の系統的な学習を修了した。1988年春には「全訣全法」の資格を修得し，師は，龍門派内丹術に代々継承されてきた証書と関係著作，授権委託書を席に授けた。ここに，席春生は龍門派性命雙修内丹術の第十三代目の継承者となり，同時に千峰先天派の第二代目の弟子となった。[10] 龍門派性命雙修内丹術は，龍門派性命雙修金丹大道ともいい，この道は，中国仙学，黄老之学，老荘之学，内丹術とも別称される。[11]

2　全真教龍門派について

次に，席春生が所属する道教集団である全真教，およびその一派である龍門派の系譜について歴史的に概観し，さらに同派の養生法「性命雙修内丹術」について解説しておきたい。

老子に始まる道家内丹煉養派の系譜には，主なものとして，尹喜所から伝わる文始派系と，王玄甫から伝わる少陽派系とがある。全真龍門派系は，この少陽派系に属する。（以下，８頁に掲げておいた伝承系譜を参照されたい）

王玄甫は，所伝に依れば李鐵拐と世に称し，またの名を王少陽，東華帝君といい，北五祖の初祖となり，鐘離権に道を伝えた。鐘離権は，字を雲房，正陽帝君といい，北五祖の二祖となり，道を呂岩と劉海蟾に伝えた。呂岩は，字を洞賓といい，号を純陽子，孚佑帝君と称し，北五祖の三祖となって，王重陽に道を伝えた。劉海蟾は，またの名を劉操，字を昭遠といい，北五祖の四祖となり，張伯端に道を伝えた。張傳石泰，石傳薛道光，薛傳陳楠，陳傳白玉蟾は，南五祖となり，後世の人びとは，これを南宗と称した。

王重陽は，またの名を王喆，字を知明，号を重陽子とし，北五祖の五祖となり，全真道を立てた。後世の人びとは，これを北宗と称した。彼は北七真に道を伝えた。七真とは，すなわち馬鈺（丹陽と号し，全真遇仙派を立てる），譚處端（長春と号し，全真南無派を立てる），劉處玄（全真随山派を立てる），邱處機（長春と号し，全真龍門派を立てる），王處一（華陽と号し，全真嶗山派を立てる），郝璘（大通と号し，全真華山派を立てる），孫不二（清浄と号し，全真清浄派を立てる）からなる，王重陽の七人の高弟のことである。

邱處機は，字を通密，長春と号し，北七真の一人として全真龍門派を立て，元の大祖チンギスハーンによって「神仙」の号と「大宗師」の爵位を賜り，全国の道教を管掌した。趙道堅は，道号を道堅と言い，龍門丹道の第一代の祖師となった。張碧芝は道号を徳純と称し，第二代目の祖師となり，道号を通微と称する陳沖夷が第三代の，道号を玄樸と称する周大拙が第四代の祖師となった。虎皮張は，道号を静虚といい，当時の名医であった。彼は西蜀の碧陽洞において周に弟子入りし，全訣全法を得，第五祖となった。これにより，龍門丹道は，初めて廟外に伝わった。

李虚庵は，道号を真明と称する安徽の人であっ

た。彼は儒教の門では秀士であり，明萬歴の己卯の年に，全訣全法を得て，第六祖となった。曹還陽は，道号を常然といい，江西南昌の人であった。幼い頃から武を好み，明萬歴の丁亥の年に，全訣全法を得て，第七代目の祖師となり，また白雲観の傳戒律師となった。伍沖虚は，道号を守陽と称する江西南昌の人であった。葵巳の年，曹に入門し，壬子の年に全訣全法を得て，第八代目の祖師となり，あわせて道教白雲観の傳戒律師となった。著書に『天仙正理』と『仙沸合宗』がある。

柳華陽は，道号を太長といい，洪都之郷の人であった。はじめ儒学を修め，清王朝の初期に翰林に及第したが，後に仏門に入り，禅宗の臨済宗の高僧となった。敬虔かつ誠実に道を求め，伍に出会って，全訣全法を授けられ，第九代目の祖師ならびに道教白雲観の傳戒律師となった。世に，彼のように仏教と道教とを一身に共に極めた人は少ない。著書に『慧命経』と『金仙證論』がある。了然は，道号を清禅と称し，はじめ仏教の禅宗・臨済宗の高僧であったが，清の乾隆年間，柳から全訣全法を授けられ，第十代目の祖師となった。道号を清浄といった了空も，やはり臨済宗の高僧であったが，清の嘉慶四年，北京の仁壽寺において柳から全訣全法を授けられ，第十代目の祖師となった。後に，師や了然とともに，江蘇瓜洲金山寺にあって，修練を深めた。劉名瑞は，全真南無派の第二十代の道士であったが，後に柳華陽に弟子入りして龍門丹法を修得した。著書に『道源精微』，『盤翁易考』，『敲蹻洞章』がある。

趙避塵は，道号を一子といい，北京昌平の人である。幼い頃より武を習い，道を慕った。清の光緒二十一年，金山寺において了然・了空の門に入り，20年後，了空は全訣全法を授けられ，あわせて「天命，法巻」を賜り，ここに第十一代目の祖師となった。趙は，了然と了空の二師のほかに，儒教，仏教，道教の三教の理を融合し，百家の長所を集めた。著書に『性命法訣明指』，『衛生性理學』，『三字法訣経』などがある。広く衆生を救うため，歴代伝わってきた単伝を改め，あまねく伝えることとし，千峰先天派を立て，龍門を継いだ。

牛金寶は，道号を玄金子と称する，河北清河の人であった。1933年，趙避塵のもとに入門し，1936年に全訣全法を修得し，師より「天命，法巻」を賜り，龍門の法統を継ぎ，千峰先天派の第一代目の弟子となり，龍門丹道第十二代傳人となった。著書に『養生延壽法』がある。席春生は，道号を妙春子とし，牛金寶の後を継いだ。[12] なお，「先天派」とは道士の法派で，いわゆる「八派」（ba-pai）の一つである。[13]

全真教（Quan-zhen jiao）は，12世紀中葉，金（1115－1234）・宋（960－1279）両王朝の戦乱で荒廃した華北地方に成立した新道教教団の一つである。北宋（960－1127）末に数種の新道教が出現するが，なかでも王重陽の全真教は大いに発展し，元代からは，正一教とともに，中国道教界を南北に二分する勢力となった。その教義の特徴は，正一教が護符や祈祷を用いて，病気平癒や災害除去，延年長寿を願うのに対して，全真教は坐禅修行を中心にして，禅宗的色彩が濃い。正一教が妻帯し，教主は血統相承であるのに対して，全真教道士は家庭を捨て，道観内で共同生活を営み，菜食主義をとる。北京の白雲観がその総本山である。[14]

12世紀後半，華北で王重陽（1112－1170）が開いた全真教は，金朝から元朝にいたる征服王朝の統治下で隆盛を迎えたが，やがて元王朝（1271－1368）の衰退とともに凋落し，長い不振の時代を迎えることになる。そのような低迷期にあって，王重陽の弟子である邱處機（1148－1227）の道統を継承し，清初の全真教の復興をもたらしたと言われる宗派が，龍門派（Long-men pai）である。現在，全真教には少なくとも，いわゆる「七真」を祖とする7つの宗派があると言われ，龍門派もそうした諸派の一つである。しかし，全真教諸派のほとんどが，いかなる系譜を有し，いかなる活動をしているのか定かでない状況にあって，独り龍門派の名ばかりが人口に膾炙しているのは，北京白雲観の全真教がまさしくこの龍門派によって運営されているという事実によるところが大きいと言われる。[15]

このように，龍門派とは，全真教の主流をなす分派で，王重陽の弟子であった邱長春を開祖とす

る。龍門派と称するのは，邱長春が青年時代に龍門山で修行したことにちなむと言われ，彼と因縁が深く，その墳墓のある北京の白雲観を，その本山としている。元代以来，全真教はいくつかの分派に分かれたが，この派が最大の勢力をなしていた。明代には，全般的に全真教はふるわなかったが，この間に龍門派は代々律師を称し戒法の伝承を主とする一派と，宗師を称し道法の伝承を主とする一派の二つの法系に分かれた。明（1368－1644）末・清（1616－1912）初に出た第7代律師王常月は，白雲観に壇を設けて公に戒を伝える制を立てた。彼は清朝の支持も得て，南方でも伝戒を行い，その弟子たちも各地で伝戒を行って支派を形成していったが，その後も清末に至るまで龍門派は分派を続け，禅宗における臨済宗と共に「龍門・臨済天下に半ばす」の言葉も生まれた。また教理的にも，劉一明・柳華陽・蚊一得らが出て，内丹説を深めるとともに，より分かりやすいかたちのものとし，社会にも受け入れられやすいものにしていったことも見のがせない。[16]

ところで，「性命双修」（xing-ming shuang-xiu）という用語であるが，「性命」は本来，儒家で重視された概念である。『中庸』第1章に，「天の命ずる，これを性と謂う」とあるように，儒家では一般に，天の賦与したものを，＜与え手＞の側から命（天命）と言い，＜受け手＞の側から性（もちまえ）といった。これが宋以降の道教，とりわけ内丹の文脈のなかでは，「性とは元始の真如，一霊炯々たるもの。命とは先天の至精，一たるもの」（『性命圭旨』性命説）のように，「性は先天の一気が凝ったもの」，「命は後天の一気が結んだもの」とか，「性は上丹田の元神」，「命は下丹田の腎気」などと言われるようになった。要するに，性は神，心であり，人間の精神活動を支えるものであるのに対して，命は気または精，身，すなわち身体活動の基礎をさす。一般的には全真北宗は性功から修養に着手し，南宗は命功から着手するとされるが，実際にはその境界はあいまいで，目ざすところは両派とも性命双修であった。性命双修のテキストとしては，清の柳華陽の『慧命経』や『金仙証論』が知られているが，すでに宋初の陳傅が禅宗の壁観と道教伝来の命功とを結びつけ，性命双修の内丹理論を提起したといわれる。[17]

この内丹（nei-dan）とは，外丹（wai-dan）に対する語であり，鉛・水銀等を用いて丹を作る外丹に対して，体内の精気などを循環させて体内に丹を作ることから名付けられた。外丹は，東晋『抱朴子』の時代に既に確立していたが，内丹はそれより遅れる形で発展したものと考えられる。全真教でも内丹は説かれ，邱処機の『大丹直指』等の書物が著され，諸真人の語録にも内丹に言及する所が見えてくる。元代になり，全真教に南宗・北宗が興ってくると，もっぱら内丹について説き，外丹は傍流として退けられるようになった。[18]

3　気功界における社会的活動

席春生は，養生の道において修行を深める一方で，社会的な活動も怠らなかった。まず，教育活動であるが，以下の通りである。

1987年，師と共に招聘に応じ，中国気功科学研究会が挙行した第1回目の養生講座のために授業を行っている。その際，師の牛金寶は，この研究会が発行した001号の招聘状を正式に受け取っている。また席は，幾度か招聘に応じ，中華気功進修学院の通信教授の学生に対して，直接的な指導をしている。[19]

1988年には，中国気功科学研究会により中国の青島で開催された第一回全国伝統気功学術研討会に特別に招かれ，来賓として参加している。[20]

この中国気功科学研究会は，中国共産党と政府の指導下にある全国的な学術団体である。ちなみに，その「章程総則」には，以下のように謳われている。

本会は，マルクス・レーニン主義と毛沢東主義を以て指導思想とし，党の路線，方針，政策を尊重し，百花斉放，百家争鳴の方針と事実に即した科学的態度を堅持し，難苦を克服する精神を発揚し，わが国に存する悠久の歴史的な気功の宝を発掘する。：気功の実践経験を研究・整理する。：気功と各学科との関係およびその

科学的な基礎理論を探求する。：中国の特色ある現代気功学を創建する。：生命科学の発展と社会主義文化事業の繁栄を促進する。：「四化」（平沢註；機械化・水利化・化学化・電化の意）に奉仕し，人類の幸福をもたらす。

本会は，大衆に向かい，全国の気功界の人士を団結させ，積極的に，科学研究，教育，衛生，体育，文化等の分野との協同協力を進め，わが国気功事業の発展を促進する。[21]

この間，席は，中国医学気功学会，世界医学気功学会からの招聘を受けて，しばしば国内および国際的な気功教育の任にあたり，中国道家の伝統気功を伝授している。[22] 第二回国際医学気功短期養成訓練グループの教育には，教授として参加している。この時の参加学生の国籍は，台湾，香港，韓国，日本，シンガポール，アメリカ，フランス，スイス，イタリア，カナダ，オーストリア等，11の国家と地域に及んだ。[23]

1995年に開催された第二回世界太極拳修練大会に招かれて，太極静功の指導者となり，また太極静功上級クラスの主任講師，正宗性命雙修内丹術の指導専門家，正宗楊氏太極拳の指導専門家として活躍した。

1996年，第三回世界太極拳修練大会にも指導者として招かれ，中国道家養生文芸体育サロンおよび太極拳サロンの主宰者，太極拳の専門家として責任を負った。

席春生は，また家に在って，たびたび国内外から来訪する求道者を接待し，彼らに辛抱強く説明・解釈し，道に迷ったところは指摘して正し，数多くの養生愛好者のために無償でサービスしている。

1994年，河南省安陽市教育委員会の許可を得て，席は安陽市に華夏龍門内丹術研修院を創設した。この研修院は，中華伝統養生文化の高揚，人類の健康に幸福をもたらすことを以て宗旨とし，併せて伝統養生文化（主に性命双修内丹術と渾元気功）の通信教育と直接指導を行っている。[24] 創立より今日にいたるまで，大部分は無償，または，ほとんど費用を取らずに教育活動を展開している。

気功に関する研究会や国際会議への参加も活発である。席は幾度も，特別に招待された来賓として，国内の，または国際的な重要な気功会議に参加してきた。

1987年，中国武術研究院，北京体育委員会，『體育博覧』，『中華武術』と『武魂』の各雑誌社が共催で開いた武術養生観摩大会に師と共に参加した。翌年，青島で開催された中国第一回全国気功学伝統理論研討会に参加し，1989年には天津で開かれた人体科学研討会に参加した。同年にはまた，西安において開催された全国気功精英研討交流会と第二回国際気功会議に，さらに北京で開催された第一回国際伝統康復医学学術会議，世界医学気功学会成立大会に参加した。1990年には，北戴河で開催された医学気功学術研討会に参加し，1992年には山東省文登で開かれた全真道発源国際研討会に参加した。これら重要な会議の組織に関する問題の検討や座談にも参加してきた。なお，1988年から1991年にかけて，中華全国中医学会医学気功研究会の会長の委託を受けて，中国の気功状況について調査研究した。[25] その他，1992年2月には全世界百歳養生センターから招聘状が届いている。[26]

1999年11月，中国の北京で開催された世界養生大会にも参加しており，論文「内丹術－中国伝統養生文化之源」を発表している。

なお，席春生の社会的地位，気功界におけるポストであるが，「華夏龍門内丹術研修院」の院長であるほか，現在，彼は中国気功科学研究会の名誉理事であり，1992年には台湾大自然気功協会の伝統養生総顧問にも就任している。[27]

席春生は，師に随って学ぶこと18年，徳の満ちた器量の人物に特有な，中国の伝統的な道徳観念と気質を形成したといわれる。すなわち，師を尊び，道を重んじ，名利に淡泊であり，正直であり，おもねらず，師の教えと祖訓を神妙に守り，徒に流行を追わない性質である。彼は，多くの社会的な気功活動に参加してはいるが，龍門派性命双修内丹術の第十三代伝人，千峰派第二代弟子としての身分を明らかにし，これらの称号を以て世に現れることは極めて少ない。[28]

彼は，気功が嵐のような勢いで盛り上がり，ほ

とんど狂気じみた熱心さとなって混濁している状態を危害浅からざることとし，この種の混乱した局面下において祖国の真正な伝統的養生文化を高揚することは不利であると認識していた。しかし，近年，気功は次第に冷静で平穏な発展段階に歩み入り，人民大衆の修練レヴェルと思弁能力が広く向上し，正統的な中国伝統養生文化を高揚する時機が日増しに成熟してきていると彼は判断している。かかる情況下にあって，国家の関係部門は気功師を改めて審査・評定することを決定した。この政策を，国を利し，民を利する深遠な意義を有する重要な措置であると認識した席は，評定の仕事に積極的に参加した。[29]

4　著作・執筆活動

このように，1980年代末から今日に至るまで，席春生は，内丹養生の研修に引き続き潜心してきたほか，気功に関する多くの社会的活動にも参与してきたが，執筆活動も怠っていない。

1992年，北京法律公証処の許可を経て，台湾大自然気功協会に専門書『渾元氣功』の正式な出版発行ならびに広告を委託している。なお，この単著『渾元氣功』（華夏龍門内丹術研究院）の出版年については，1頁に作者の名の下に1992年12月とあるが，2頁目の「印刷説明」には1994年3月とあり，さらに「后記」（142頁）には1993年3月とあり，一貫性がない。（本論文の註では，一応1993年としておいた。）

また，共著としては，第一回世界太極拳修練大会学術委員会編『太極拳・静座・保健按摩』（吉林人民出版社，1994年）を分担執筆し，「静座気功」の部のなかの論文「讓正宗丹法重現光彩」を担当している。

恩師である牛金寶の著した『養生延壽法』なる書の執筆に参与し，出版発行の仕事の主たる責任を負った。また，中国気功科学研究会の文献委員会に参加して，千峰老人趙避坐の著書『性命法訣明指』という書物の再版，選本，審理の仕事にも従事し，師に代わって序言を執筆した。[30]

席は1989年から1991年にかけて，中華全国中医学会医学気功研究会の雑誌『中華気功』編集部から，中国伝統養生気功の専門家として招聘された[31]ほか，一般的な雑誌への執筆も活発で，雑誌『世界気功』創刊号（1990年1月）に「内煉丹法有真伝」を，『気功与環境』（1994年1月）に「内修大道与外練筋骨」を執筆[32]するなど，『中華気功』，『世界気功』，『中外気功』，『気功と環境』，『健康指南』，『武魂』，『女性世界』等，雑誌や新聞に文章を発表してきている。中国の伝統的養生の観点を解説し，気功の理論と方法を紹介しつつ，気功界の弊害と建設的なありかたについて啓蒙している。[33]

1994年には，国家体育委員会の委託を受け，中国武術研究院が主催した第一回世界太極修練大会に招かれて，学術委員会の専門委員となり，太極静功の原稿作成や審判の仕事に参与し，また大会で作製した3種類の気功法ビデオの製作に関わり，太極静功を解説した。

5　古書の保存と復刻

席は以上の活動と併行して，気功文献の発掘整理の仕事にも従事している。

1996年以来，ほとんど伝承が絶えようとしている古代の著名な養生専門書を急いで救うことに彼は率先して活動してきた。その主なものに次のようなものがある。清末の徳高い道士であった劉名瑞が著した『道源静微』，『敲跡洞章』，『澄熵易考』，蔣克志『修道全指』，および原本の元の姿に照らして改めて新たに印刷した千峰老人趙避坐の著書『性命法訣明指』，趙魁一『三字法訣経』。

席春生は「華夏龍門内丹術研修院」において伝統的な養生文献の発掘と整理事業にあたっている。学生たちの自発的な援助により，古書籍の困難な保存状態に対処し続けている。[34]

謝　辞

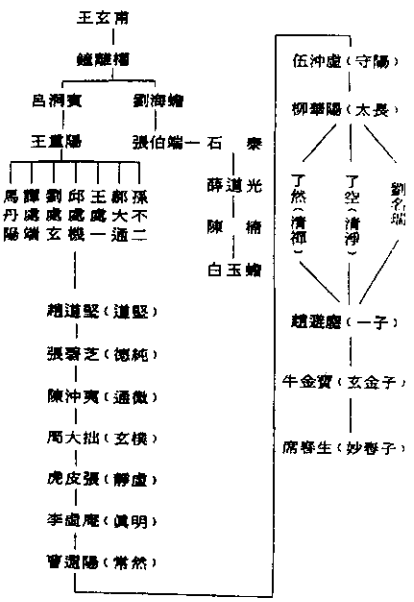
以上の紹介論文は，鹿屋体育大学に研究生として中国北京から留学している李淑双さんから恵与された中国語資料に依拠している。末尾に付記して謝意を表したい。

註

1）野口鐵郎・坂出祥伸・福井文雅・山田利明『道教事典』平河出版社，1994年，441-442頁．
2）邦訳としては，湯浅泰雄・定方昭夫訳『黄金の華の秘密－中国の生命の書』人文書院，1980年．
3）邦訳としては，川勝義雄『道教』平凡社（東洋文庫329），1978年．
4）村山吉廣『漢学者はいかに生きたか＜近代日本と漢学＞』大修館書店（あじあブックス018），1999年，158-159頁．
5）『道教思想史研究』岩波書店，『道教と日本文化』人文書院，『道教と古代日本』人文書院，『老子』朝日新聞社，等．
6）中華民国大自然気功協会（理事長：李在方）が席に与えた奨状（中大気奨字第203号，1994年4月30日）によれば，彼の出生年月日は1951年2月28日である．
7）席春生『渾元氣功』華夏龍門内丹術研修院，1993年，10頁．
8）『道教事典』，520頁．
9）席春生「席春生簡介」（私家版），1頁．
10）席春生『渾元氣功』華夏龍門内丹術研修院，1993年，10頁．
11）席春生「席春生簡介」（私家版），1頁．
12）以上の系譜に関する記述は，席春生「龍門丹道源流及本支脈傳承譜系」（『渾元氣功』，14-16頁）に依拠した．なお，これら初期の祖師たちについては『黄金の華の秘密』のなかでも登場するが，とくに呂については湯浅泰雄が巻末の記者解説の中で，先行研究にふれつつ詳しく紹介している．
13）「八派」には，その他，道徳派，霊宝派，正一派，清微派，浄明派，玉堂派，天心派がある．五代以来，法の微妙な差異を以て一派を立てる傾向が生じた．『道教事典』，492頁．
14）『道教事典』，333頁および442頁．
15）森由利亜「全真教龍門派系譜考－『金蓋心灯』に記された龍門派の系譜に関する問題点について－」，道教文化研究会編『道教文化への展望』平河出版社，1994年，180-181頁．
16）『道教事典』，603頁
17）『道教事典』，326頁
18）同上書，474－475頁．
19）席春生『渾元氣功』，12頁．
20）席春生「席春生簡介」（私家版），1頁．
21）中国気功科学研究会による席春生への「発証」（1993年2月，編号1687）に依る．
22）世界医学気功学会中国分会，席春生（当時，43歳）の「会員証」（1993-94年，有効）
23）席春生『渾元氣功』，12頁．
24）席春生「華夏龍門内丹術研修院簡介」（私家版），2頁．
25）席春生『渾元氣功』，12頁．
26）世界生産科学連盟中国分会「聘書」（1992年2月10日）
27）中華民国大自然気功協会から贈られたものとしては，「聘書」（1992年3月8日），「中大気聘　字第203号」（1994年4月30日，有効期間1998年4月24日），「感謝状」（1994年4月）がある．
28）席春生「席春生老師簡介」（私家版），2頁．
29）同上．
30）席春生『渾元氣功』，11頁．
31）中華全国中医学会医学気功研究会の『中華気功』編集部からの席春生あての「聘書」（1989年3月30日）
32）以上は，席春生「席春生簡介」（私家版），1-2頁．
33）席春生「席春生老師簡介」（私家版），2頁．
34）席春生「華夏龍門内丹術研修院簡介」（私家版），2頁．

＜参考資料＞

傳承簡表



席春生『渾元氣功』17頁より

（平成12年2月2日　受付
平成12年2月4日　受理）